

日蓮大聖人御書全集

こうにちぼうごしよ

光日房御書

新版
1248
ゝ
1255

こうにちぼうごしよ

光日房御書

けんじ

ねん

がつ

さい

こうにちあま

建治 2 年 ('76)

3 月

55 歳

光日尼

い

ぶんえいはちねんたいさいかのとひつじくがつ

ごかんき

被

去ぬる文永八年太歳辛 未九月のころより御勘氣をかぼ

ほつこく

かいちゆう

さど

しま

放

りて北国の海中、佐渡の島にはなたれたりしかば、なにと

そうしゆうかまくら

す

しやうごく

あわのくに

恋

なく、相州鎌倉に住みしには、生国なれば安房国はこいし

わくに

ひとこころ

睦

かりしかども、我が国ながらも人の心もいかにとやむつび

つね

通

過

にくくありしかば、常にはかようこともなくしてすぎしに、

ごかんき

み

しぎい

くに

御勘氣の身となりて死罪となるべかりしが、しばらく国の

そと

放

うえ

鎌

倉

帰

外にはなたれし上は、おぼろけならではかまくらへはかえ

るべからず。かえらずば、また父母のはかふぼをみる身見みとなり

がたしとおも思いつづけしかば、いまさらとびたつばかり

くやしくて、「などか、かかる身みとならざりし時、日にも月とき

にも、海うみもわたり山をもこえて、父母のはかをもみ、師匠ししようの

ありようをもといおとずれざりけん」となげかしくて、彼のか

蘇武が胡国に入つて十九年、かりの南へとびけるをうらや

み、仲丸が日本国の朝使としてもろこしにわたりてありし

が、かえされずしてとしを経しかば、月の東に出でたるを

みて、「我が国、みかさの山にもこの月は出でさせ給いて、

ふるさと ひと ただいま つき む 眺 へこころ 澄
故里の人も只今、月に向かつてながむらん」と心をすまし
てけり。

これもかくおもいやりし時、我が国よりある人のびんに
思 とき わ くに ひと 便

つけて衣をたびたりし時、彼の蘇武がかりのあし、これは
へこころ 給 とき か そぶ 雁 足

現に衣あり、にるべくもなく、心なぐさみて候いしに、
げん へこころ 似 へこころ 慰 そうら

日蓮はさせる失あるべしとはおもわねども、この国のなら
にちれん とが 思 くに 習

い、念仏者と禅宗と律宗と真言宗にすかされぬるゆえに、
ねんぶつしや ぜんしゅう りつしゅう しんごんしゅう 賺

法華経をば上にはとうとむよしをふるまい、心には入らざ
ほけきょう うえ 尊 由 振 舞 へこころ い

るゆえに、日蓮が法華経をいみじきよし申せば、威音王仏の
にちれん ほけきょう 由 もう いおんのうぶつ

すえ まつぼう ふきようぼさつ 憎 かみいちにん しもばんにん

末の末法に不輕菩薩をにくみしごとく、上一人より下万人

な 聞 思

にいたるまで、名をもきかじ、まして形をみることはおも

とが

いよらず。されば、たとい失なくとも、かくなさるる上は

許

ゆるしがたし。

況 ひと ふぼ 重 にちがつ

ましていおうや、日本国の人の父母よりもおもく、日月よ

高 恃

りもたかくたのみたまえる念仏を無間の業と申し、禪宗は

てんま しよい しんごん ぼうこく じゃほう ねんぶつしや ぜんしゅう りつそうとう

天魔の所為、真言は亡国の邪法、念仏者・禪宗・律僧等が

てら 焼 払 ねんぶつしや くび 刎 もう うえ

寺をばやきはらい念仏者どもが頸をはねらるべしと申す上、

こさいみようじ ごくらくじ りようにゆうどうどの あびじごく お たま

故最明寺・極楽寺の両入道殿を「阿鼻地獄に堕ち給いた

り」と申すほどの大禍ある身なり。これら程の大事を上下

ばんにん　もう

万人に申しつけられぬる上は、たといそらごとなりとも、

よ　浮

この世にはうかびがたし。いかにいおうや、これはみな

ちようせき　もう　ちゆうや　だん

へいのさえもののじようとう　すうひやくにん

朝夕に申し昼夜に談ぜしうえ、平左衛門尉等の数百人の

ぶぎようにん　もう

科　おこな　もう　止

奉行人に申しきかせ、いかにとがに行わるとも申しやむま

由　強　言　聞

じきよし、したたかにいいきかせぬ。されば、大海のそこの

千引　いし　浮　てん　降　あめ　ち　落

ちびきの石はうかぶとも、天よりふる雨は地におちずとも、

にちれん　鎌　倉　かえ

日蓮はかまくらへは還るべからず。

ほけきよう　実　にちがつわれ　捨　たま

ただし、法華経のまことにおわしまし、日月我をすて給わ

帰

い

ふ ぼ

墓

見

辺

ずば、かえり入つて、また父母のはかをもみるへんもあり

こころ 強

ぼんてん たいしゃく にちがつ してん

なんと、心づよくおもいて、「梵天・帝釈・日月・四天は、

たま

てんしょうだいじん しょうはちまんぐう

いかになり給いぬるやらん。天照太神・正八幡宮は、こ

くに

ぶつぜん

ごきしょう

虚

ほけきよう

の国におわせぬか。仏前の御起請はむなしくて、法華経の

ぎようじや

捨

たも

かな

にちれん

み

行者をばすて給うか。もしこのこと叶わずば、日蓮が身の

惜

おのおのげん

きようしゆしゃくそん

なにともならんことはおしからず。各々現に教主釈尊と

たほうによらい

じつぼう

しよぶつ

ごほうぜん

せいじよう

た

たま

多宝如来と十方の諸仏の御宝前にして誓状を立て給いし

いま

にちれん

しゆご

す

たも

しょうじきしゃほうべん

が、今、日蓮を守護せずして捨て給うならば、正直捨方便

ほけきよう

だいもうご

くわ

たま

じつぼうさんぜ

しよぶつ

の法華経に大妄語を加え給えるか。十方三世の諸仏を

誑

たてまつ

おんとか

だいばだった

だいもうご

超

たばらかし奉れる御失は、提婆達多が大妄語にもこえ、

くぎやりそんじゃ　こおうざい

勝

だいぼんてん

瞿伽利尊者が虚誑罪にもまされたり。たとい大梵天として

しきかい　いただき

こ

せんげんてん

しゆみ

いただき

色界の頂に居し、千眼天といわれて須弥の頂におわす

にちれん

捨

たも

あび

ほのお

薪

とも、日蓮をすて給うならば、阿鼻の炎にはたきぎとなり、

むけんだいじよう

出

期

つみ

恐

思

無間大城にはいずるごおわせじ。この罪おそろしくおぼせ

謂

急

くに

験

出

ば、『そのいわれあり』といそぎいそぎ国にしるしをいだし

たま

ほんごく

帰

たま

たか

やま

だいおんじよう

給え。本国へかえし給え」と、高き山にのぼりて大音声

放

叫

くがつ

じゆうにち

ごかんき

じゆういちがつ

はなちてさけびしかば、九月の十二日に御勘気、十一月に

むほん

者

出

来

返

とし

にがつじゆういちにち

にほんこく

謀反のものいできたり、かえる年の二月十一日に日本国の

固

たいしよう

由

う

殺

てん

かためたるべき大将ども、よしなく打ちころされぬ。天の

責

頭

驚

でし

せめということあらわなり。これにやおどろかれけん、弟子

許

どもゆるされぬ。

許

ごうじよう

てん

しかれどもいまだゆりざりしかば、いよいよ強盛に天に

もう

かしら

しろ

からす飛

きた

か

えん

丹

たいし

申せしかば、頭の白き鳥とび来りぬ。彼の燕のたん太子の

うま

からす

例

にちぞうしようにん

やま

鳥

頭

白

馬・鳥のれい、日蔵上人の「山がらすかしらもしろくな

わ 帰

とき

き

詠

りにけり我がかえるべき期や来ぬらん」とながめしこれな

もう

合

ぶんえいじゅういちねんにがつじゅうよつか

ごしやめんじよう

どう

りと申しもあえず、文永十一年二月十四日の御赦免状、同

さんがつようか

さどのくに

着

どうじゅうさんにち

くに

た

三月八日に佐渡国につきぬ。同十三日に国を立て、

真 浦

津

じゅうよつか

彼

津

留

おな

まうらというつにおりて、十四日はかのつにとどまり、同じ

じゅうごにち

えちご

てら

泊

津

着

おおかせ

放

き十五日に越後の寺どまりのつにつくべきが、大風にはな

二

日 路

過

柏

崎

着

たれ、さいわいにふつかじをすぎて、かしわざきにつきて、

つき

ひ

国 府

じゅうににち

さんがつにじゅうろくにち

かまくら

次の日はこうにつき、十二日をへて、三月二十六日に鎌倉へ

い

おな

しがつようか

へいのさえもののじよう

げんざん

もと

期

入りぬ。同じき四月八日に平左衛門尉に見参す。本よりご

にほんこく

亡

たす

さんど

せしことなれば、日本国のほろびんを助けんがために三度

諫

おんもち

さんりん

交

由

ぞん

いさめに御用いなくば山林にまじわるべきよし存ぜしゆ

どうごがつじゅうににち

かまくら

出

えに、同五月十二日に鎌倉をいでぬ。

ほんこく

いまいちどふぼ

墓

見

ただし、本国にいたりて今一度父母のはかをもみんと

思

錦

着

ふるさと

帰

おもえども、にしきをきて故郷へはかえれということ

ないげ

掟

めんぼく

ほんごく

内外のおきてなり。させる面目もなくして本国へいたりな

ふこう

もの

難

ば、不孝の者にてやあらんずらん。これほどのかたかりし

破

鎌

倉

帰

い

み

ことだにもやぶれてかまくらへかえり入る身なれば、また

錦

着

とき

ふぼ

墓

にしきをきるへんもやあらんずらん、その時、父母のはかを

見

深

思

しようごく

至

もみよかしとふかくおもいうゆえに、いまに生国へはいたら

恋

ふ

かぜ

た

雲

ひがし

ねども、さすがこいしくて、吹く風、立つくもまでも、東

方

もう

いおり

出

み

触

にわ

た

見

のかたと申せば、庵をいでて身にふれ、庭に立ってみるな

り。

ふるさと ひと

こころ 寄

思

かかることなれば、故郷の人は、たとい心よせにおもわ

わ くに ひと

懷

ぬものなれども、我が国の人といえばなつかしくてはんべ

おん 文 た

こころ

急

るところに、この御ふみを給びて、心もあらずしていそぎ

開 見そうら

ろくがつ ようか

弥

いそぎひらきてみ候えば、「おととしの六月の八日に、いや

しろう 後

おん 文

広

四郎におくれて」とかかれたり。御ふみも、ひろげざりつ

嬉

いま

言 葉 読

るまではうれしくてありつるが、今このことばをよみてこ

急 開

浦 島 こ

箱

そ、なにしにかいそぎひらきけん、うらしまが子のはこな

開 悔

れや。あけてくやしきものかな。

わ くに

憂 辛

ひと 末

我が国のことは、うくつらくあたりし人のすえまでも、

疎

思

ひと

かたち

つね

ひと

おろかならずおもうに、ことさらこの人は形も常の人には

過

見

うえ

気色

頑

すぎてみえし上、うちおもいたるけしきかたくなにもなし

見

ほけきよう

御座

ひとびと

とみしかども、おりしも法華經のみざなれば、しらぬ人々

数多

ことば

きよう果

たま

あまたありしかば、言もかけずありしに、經はてさせ給い

みなひと

た

ひと

た

つか

い

て、皆人も立ちかえる、この人も立ちかえりしが、使いを入

もう

あわのくに

天津

もう

もの

そうろう

れて申せしは、「安房国のあまつと申すところの者にて候

幼

おんこころ

思

そうろううえ

はは

が、おさなくより御心ざしおもいまいらせて候上、母に

そうろうひと

疎

もう

馴

々

もう

こと

そうろう

て候人もおろかならず申し、なれなれしき申し事にて候

もう

そうろう

前

々

えども、ひそかに申すべきことの候。さきざきまいりて、

しだい 馴

次第になれまいらせてこそ申し入るべきに候えども、

弓 矢

ひと

宮 仕

隙 そうら

うえ

こと 急

ゆみやとる人にみやづかいてひま候わぬ上、事きゆうにな

そうら

うえ

恐

顧

もう

り候いぬる上は、おそれをかえりみず申す」と、こまごま

聞

しょうごく

ひと

うえ

ときこえしかば、なにとなく生国の人なる上、そのあたり

憚

のことははばかりるべきにあらずとて、入れたてまつりて、

来

方

行

末

語

い

せけん

こまごまとこしかたゆくすえかたりて、のちには、「世間、

むじよう

もう

知

うえ

ぶし

み

無常なり。いつと申すことをしらず。その上、武士に身を

任

み

近

もう

そうろう

まかせたる身なり。またちかく申しかけられて候こと、

逃

ごしょう

恐

そうら

のがれがたし。さるにては、後生こそおそろしく候え。た

すけさせ給え」ときこえしかば、経文をひいて申しきかす。
たま 聞 きようもん もう 聞

彼のなげき申せしは「父はさておき候いぬ。やもめにて
か もう うち そちら

候はわをさしおきて、前に立ち候わんことこそ不孝にお
そうろう 母 差 置 さき た そちら ふこう

ぼえ候え。もしやの事候ならば、御弟子に申しつたえて
そうら ことそうろう みでし もう 伝

たび候え」と、ねんごろにあつらえ候いしが、そのたび
そうら 懇 詔 そちら

は事ゆえなく候べけれども、後にむなしくなることのい
こと 故 そうろう のち 虚 出

できたりて候いけるにや。
来 そちら

人間に生をうけたる人、上下につけてうれえなき人はな
にんげん しょう ひと じょうげ 憂 ひと

けれども、時にあたり、人々にしたがいて、なげきしなじな
とき ひとびと 歎 品々

なり。たと譬えば、やまい病のならいは、習いずれの病も、やまい重くなり

ぬれば「これにすぎたる病なし」とおもうがごとし。過主のやまい

別わかれ、親おやのわかれ、ふさい夫妻のわかれ、疎いずれかおろかな

るべきなれども、しゆ主はまた、ほか他の主もありぬべし。ふさい夫妻は

また、代かわりぬれば心をやすむることもありなん。こころおやこ

のわかれこそ、つきひ月日のへだつるままに、隔いよいよなげきふか

かりぬべくみえ候え。見おやこのわかれにも、親おやはゆきて

子こはとどまるは、留同じ無常なれどもことわりにもや。おなおい

たるはわはとどまりて、母わきき子のさきにたつ。留なさけなき

若先立情無

ことなれば、神も仏もうらめしや。いかなれば、おやに子こ

代

たま

先

立

たま

をかえさせ給いてさきにはたてさせ給わず、とどめおかせ

たま

歎

たも

こころ憂

給いてなげかさせ給うらんと心うし。

こころ

ちくしよう

こ

別

忍

心なき畜生すら、子のわかれしのびがたし。竹林精舎

きんちよう

卵

み

焼

ろくやおん

しか

たいない

こ

の金鳥はかいごのために身をやき、鹿野苑の鹿は胎内の子

惜

おう

まえ

況

こころ

をおしみて王の前にまいれり。いかにいおうや、心あらん

ひと

おうりよう

はは

こ

脳

人においてをや。されば、王陵が母は子のためになずきを

碎

しんぎようこうてい

きさき

たいない

たいし

おん

はら

破

くだき、神堯皇帝の后は胎内の太子の御ために腹をやぶ

たま

思

続

たま

ひ

らせ給いき。これらをおもいつづけさせ給わんには「火に

も入り、頭いこうへをもわりて、我が子の形をみるべきならばおし破からず」思とこそおぼすらめとおもいやられて、なみだもとど思まらず。涙止

また、御消息ごしやうそくに云わく「人ひとを殺ころしたりし者なれば、

いかようなる所ところにか生まれうて候そうろうらん。おおせ仰をか被ぼ

り候そうらわん」うんぬんと云々。

夫れ、針はりは水みずにしずむ。雨あめは空そらにとどまらず。蟻子ありのこを殺ころせ

る者ものは地獄じごくに入り、死しにか屍ばねを切きれる者ものは悪道あくどうをまぬか免

れず。いかにいわんや、人身じんしんをうけたる者ものを殺ころせる人ひとを

や。ただし、大石も海にうかぶ。船の力なり。大火もきゆ

みず ゆう

しょうざい

ざんげ

ること、水の用にあらずや。小罪なれども懺悔せざれば

あくどう

免

だいぎやく

ざんげ

つみ消

悪道をまぬかれず、大逆なれども懺悔すれば罪きえぬ。

あわ 摘

びく

ごひやくしょう

あいだうし

いわゆる、粟をつみたりし比丘は五百生が間牛となる。

まこも

もの

さんあくどう

お

らまおう

ばつだいおう

びる

菰をつみし者は三悪道に堕ちにき。羅摩王・拔提王・毘楼

しんおう

なごしやおう

かたいおう

びしやきやおう

がつこうおう

こうみようおう

につこう

真王・那睺沙王・迦帝王・毘舍佉王・月光王・光明王・日光

おう

あいおう

じたにんおうとう

はちまんよにん

しょうおう

みな

ちち

ころ

くらい

王・愛王・持多人王等の八万余人の諸王は皆、父を殺して位

即

ぜんちしき

値

つみ消

あびじごく

い

につく。善知識にあわざれば、罪きえずして阿鼻地獄に入り

にき。

はらなじよう

あくにん

な

あいった

はは

愛

波羅奈城に悪人あり。その名をば阿逸多という。母をあ

ちち

ころ

め

ちち

し

あらかん

せしゆえに、父を殺し、妻とせり。父が師の阿羅漢ありて

きようくん

あ 羅 漢

ころ

はは

ほか

おとこ

嫁

教訓せしかば、阿らかんを殺す。母また他の夫にとつぎ

はは

ころ

さんぎやくざい

しかば、また母をも殺しつ。つぶさに三逆罪をつくりしか

りんり

ひと

疎

いっしん

保

ぎおん

ば、隣里の人うとみしかば、一身たもちがたくして祇園

しょうじや

行

しゆつけ

しよそうゆる

精舎にゆいて出家をもとめしに、諸僧許さざりしかば、

あくしんごうじよう

おお

そうぼう

焼

しやくそん

悪心強盛にして多くの僧坊をやきぬ。しかれども、釈尊に

あ

たてまつ

しゆつけ

たま

値い奉って、出家をゆるし給いにき。

ほくてんじく

じよう

さいしやく

名

か

じよう

おう

北天竺に城あり。細石となづく。彼の城に王あり。

りゆういん

ちち ころ

のち

恐

竜印という。父を殺してありしかども、後にこれをおそれ

か くに 捨 ほとけ

ほとけ さんげ ゆる

て、彼の国をすてて仏にまいりたりしかば、仏、懺悔を許

たま

し給いき。

あじゃせおう 人

さんどくしじよう

じゆうあく 隙 無

阿闍世王はひととなり三毒熾盛なり。十惡ひまなし。そ

うえ ちち はは がい

だいばだった し

の上、父をころし、母を害せんとし、提婆達多を師として

むりよう ぶつでし ころ

あくぎやく 積

にがつじゆうごにち ほとけ

無量の仏弟子を殺しぬ。惡逆のつもりに、二月十五日、仏

ごにゆうめつ ひ

むけんじごく

せんそう しちしよ あくそう

の御入滅の日にあたりて、無間地獄の先相に七処に惡瘡

しゆつしよう ぎよくたい 静

たいか み 焼

出生して、玉体しずかならず。大火の身をやくがごとく、

ねつとう 汲 掛

ろくだいじん

ろくし

熱湯をくみかくるがごとくなりしに、六大臣まいりて、六師

げどう

め

あくそう

じ

様　もう

いま　にほんこく

外道を召されて悪瘡を治すべきよう申しき。今の日本の

ひとびと

ぜんじ

りつし

ねんぶつしや

しんごんしとう

ぜんちしき

恃

人々の、禅師・律師・念仏者・真言師等を善知識とたのみ

もうここく

じようぶく

ごしやう

助

て蒙古国を調伏し、後生をたすからんとおもうがごとし。

うえ

だいばだった

あじやせおう

ほんし

げどう

ろくまんぞう

その上、提婆達多は阿闍世王の本師なり。外道の六万蔵、

ぶつぼう

はちまんぞう

空

せけん

しゆつせ

仏法の八万蔵をそらにして、世間・出世のあきらかなるこ

にちがつ

みようきやう

む

いま

よ

てんだいしゆう

と、日月と明鏡とに向かうがごとし。今の世の天台宗の

せきがく

けんみつにどう

むね

いつさいきやう

空

碩学の顕密二道を胸にうかべ、一切経をそらんぜしがごと

ひとびと

もろもろ

だいじん

あじやせおう

きやうくん

し。これらの人々、諸の大臣、阿闍世王を教訓せしかば、

ほとけ

きえ

たてまつ

まかだい

てんぺんたびたび

仏に帰依し奉ることなかりしほどに、摩竭提に天変度々

かさなり、地天しきりなる上、大風・大旱ばつ・飢饉・疫癘

隙 無 うえ たこく 責 ちよう うえ おおかぜ だいかん 魃 ききん えきれい

ひまなき上、他国よりせめられて、すでにこうとみえしに、

あくそう み い こくどいちじ 亡 見

悪瘡すら身に出でしかば、国土一時にほろびぬとみえしほ

ぶつぜん さんげ つみ消

どに、にわかには前にまいり、懺悔して罪きえしなり。

そうら ひと 親 あくにん

これらはさておき候いぬ。人のおやは悪人なれども、子

ぜんにん つみ 許 こあくにん

善人なれば、おやの罪ゆるすことあり。また子悪人なれど

おやぜんにん こ つみ

も、親善人なれば、子の罪ゆるさるることあり。されば、故

やしろうどの あくにん 生 はは しゃかぶつ ごほうぜん

弥四郎殿はたとい悪人なりとも、うめる母、釈迦仏の御宝前

ちゆうや 歎 弔 か ひと浮

にして昼夜なげきとぶらわば、いかでか彼の人うかばざる

べき。いかにいおうや、彼の人は法華經を信じたりしかば、

親導み況かひとほけきようしん

おやをみちびく身とぞなられて候らん。

ほけきようしんひとほけきよう敵

法華經を信ずる人は、かまえてかまえて法華經のかたき

恐たまねんぶつしやじさいしんごんしいっさい

をおそれさせ給え。念仏者と持斎と真言師と、一切

なんみようほうれんげきようもうほけきよう誦

南無妙法蓮華經と申さざらん者をば、いかに法華經をよむ

ほけきよう知知

とも法華經のかたきとしろしめすべし。かたきをしらねば、

誑そうろう

かたきにたばらかされ候ぞ。

見参い詳もうそうら

あわれ、あわれ、げんざんに入つてくわしく申し候わば

渡そうろうさんみぼうさどこうとう

や。また、これよりそれへわたり候三位房・佐渡公等に、

文 読 聞

たびごとにこのふみをよませてきこしめすべし。また、こ

おんふみ

みようえぼう

預

たも

わ

の御文をば、明慧房にあずけさせ給うべし。なにとなく我が

ちえ 足

もの

痴

ふみ

智慧はたらぬ者が、あるいはおこづき、あるいはこの文を

才 覚

謗

そうろう

ごぼう

さいかくとしてそしり候なり。あるいは「よも、この御房

こうぼうだいし

勝

じかくだいし

超

は弘法大師にはまさらじ。よも慈覚大師にはこえじ」なん

ひと 比

そうろう

もう

ひと

知

もの

ど、人くらべをし候ぞ。かく申す人をば、ものしらぬ者と

思

おぼすべし。

けんじにねんたいさいひのえねさんがつ

にち

にちれん

かおう

建治二年太歳丙子三月 日

日蓮 花押

こうしゅうなんぶはきいのごうさんちゅう

甲州南部波木井郷山中